

学生海外調査研究	
18 世紀ロシアの帝位継承と貴族—ピョートル 2 世遺言状偽造事件を手がかりに—	
鈴木 佑梨	比較社会文化学専攻
期間	2014 年 8 月 30 日～2014 年 9 月 26 日
場所	モスクワ、サンクト・ペテルブルク(ロシア)
施設	ロシア国立古文書アルヒーフ、ロシア歴史図書館、国立歴史博物館、ロシア国立歴史アルヒーフ、エルミタージュ美術館

内容報告

1. 海外調査研究の意義と目的

報告者は、専制体制が強調されがちであったロシアにおいて貴族が重要な役割を果たし、体制を機能させていたという観点から、皇帝や貴族の関係性に着目して 18 世紀ロシア政治史の研究を行っている¹。こうしたメカニズムを明らかにすることによって他国の政治史との比較的視点を提示できると考えているためである。近年、ロシア本国でもこの時代への見直しが積極的に行われているが²、まだ十分なものであるとは言い難い。そこで報告者は、これら貴族と統治形態との関係性が最も顕著に表れるのが宮廷クーデターや帝位継承などの政治的事件であると仮定し、修士論文では「1730 年政変におけるロシア貴族の集団形成」という題目で、ある宮廷クーデターにおいて貴族が形成した諸集団の特徴とその形成過程を明らかにした。ただしこの論文は史料的制約から宮廷クーデターに限定して主要な貴族を俯瞰し、事件の全体的な構図を明らかにするにとどまっており、個々の貴族の家柄や立場、事件前後の立場の変化などといった具体例に肉薄することがその後の課題として残った。昨年度の海外調査では、修士論文におけるこうした課題を克服するために宮廷クーデターの前後で立場が激変したドルゴルーキー族に焦点を当て、ロシア貴族の政治的地位の変動を示す史（資）料を収集した。現在、これらを整理して査読論文への投稿を準備している。そしてこのような研究の過程で、皇帝を中心とする政治システムと貴族の関係性、それに対する同時代人のまなざしを明らかにする必要があるという課題が浮かび上がった。

「女性リーダーを創出する国際拠点形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの支援を受けた本調査では、これらの課題を克服し、また今後の研究の準備を行うという観点からも、ロシアにおける貴族研究の現状を把握し、日本では入手することができないこれらの関連史料や文献を収集することが最大の目的であった。具体的には 1730 年政変においてピョートル 2 世の遺言状を偽造し、婚約者であった一族の娘への帝位継承を企んだ大貴族ドルゴルーキー家（Доругорукый）の家長であったヴァシーリー・ルキーチに注目し、人々の噂と裁判の史料を用いて貴族の皇位継承への介入のメカニズムを明らかにする。以上の観点から、報告者はモスクワとサンクト・ペテルブルクの文書館や図書館を中心とした史料収集と、博物館や美術館の見学を行った。

2. 調査の概要

本章では今回の調査で訪問した施設について、報告者にとって研究上特に重要であった 5 つの施設を取り上げ、各施設の所在や概要、利用方法、環境、報告者が行った活動などを紹介してゆく。

2.1 ロシア国立古文書アルヒーフ Российский государственный архив древних актов(略称 РГАДА)

中世から 19 世紀前半までの史料を所蔵するモスクワの古文書館である。なお、同じ敷地内には 19 世紀から 20 世紀の史料を有するロシア連邦古文書館 Государственный архив Российской Федерации も存在する。開館時間や利用方法については昨年を利用時からの変更はなかった。

このアルヒーフで、報告者はホームページを通じて日本であらかじめ調べておいたフォンド番号をもとに閲覧室で改めて目録を確認し、史料の請求を行った。昨年の史料申請時には 1 回 3 件までと注意されたが、今回はそうした制約がなかったため、初日に 6 件の史料を請求することができた。今回報告者の利用した時期が、偶然利用者が少なかったためにこのように多少の融通を図ってもらえたの

ではないかと思われる。しかしこのアルヒーフでは史料の準備に 2 日かかるため、こうした便宜によって報告者は初回の閲覧日から多くの史料を確認することができた。また滞在中に何度か追加で史料の請求を行ったが、場合によっては 1 日で史料を準備してもらえ、時間を有効利用することができた。

報告者の利用した史料は 18 世紀のものであったため、史料はすべてマイクロフィルムで用意され、専用のマイクロフィルム室で閲覧した。この部屋の環境や利用方法なども昨年と同じであるが、ライトが暗かったり、画面が破損したりといった不具合を抱えた機械が増加していたように感じた。そのため、問題なく使える機械を記憶し、朝一番で席を取って(閉館まで)利用するか、そうした機械が既に使われている場合には、その機械の利用者が早めに帰宅することがあれば声をかけて素早く席を移動する必要があった。史料収集とは程遠い行動のように思われるが、報告者の読んでいる史料は手書きで、時には乱雑な筆跡のものやインクが薄いものもあったため正常な機械の明るい光で文字を照らすことが不可欠であったのである。

史料の複写は、1 階の複写課に申し込む必要がある。料金は見開き 1 枚あたり 195 ルーブルであり、昨年から変更はなかった。しかし、有料の写真撮影も可能であると教えられ、今回はそのシステムを利用することにした。この場合も、所定の用紙に複写したい史料のフォンド番号や利用者の住所をはじめとする必要事項を記入し、事前に提出する必要がある。撮影までには数日かかるため、できるだけ早く申請しなければならない。撮影の日時と場所は用紙提出の際に提案される。撮影は館員の立会いのもとで、いくつかのデスクランプが用意され、マイクロフィルムからではなく現物の史料から報告者本人が行った。撮影後には、閲覧室で撮影に用いた現物の史料を確認することもできる。また、閲覧室には新たに数台のコンピューターが設置されたため、それを用いて撮影したデータが間違っていないか、あるいはぶれていないかなどの確認を行うことができるようになった。こうした作業の間に振込用紙が準備される。翌日までに銀行で料金を振り込み、用紙を館員に提出しなければならない。銀行での手続きは非常に簡単で、用紙とお金を窓口を持ってゆけばよいだけなのだが、ロシアの銀行窓口は非常に混雑し、流れも遅いため、余裕を持って臨む必要がある。この史料撮影は見開き 20 ページごとに 1000 ルーブルであり、これを一単位として申請を行う。それでも非常に高額であるが、複写依頼の際の金額に比べれば良心的であると言えよう。

昨年の史料調査の経験から、アルヒーフにおいては史料の申請、複写史料の早期確定・申請、史料閲覧・手書による筆写という流れが最も効率的であると学び、今回の史料収集ではその手順で史料収集を進めた。その結果、このアルヒーフではヴァシーリー・ルキーチの裁判と人々の噂に関する複写史料を 60 枚、筆写史料を 20 枚近く収集することができた。また、ある程度手書きの文字や省略記号に慣れてきたこともこのような効率化に結びついたと考えられる。

ほとんどの館員は歴史学博士候補(日本の修士かそれ以上の学位に相当)の称号を有しており、わからないことがあれば容易に質問することができる。報告者も関連分野の館員に面会を申し込み、現在の研究を行う上でどのような史料や文献を読めばよいのか聞くことができた。こうした面会の申し込みは閲覧室の館員に声をかけると、すぐに相手に内線で連絡を取ってくれる。そして相手に時間があればすぐに閲覧室に来てくれるのである。

昨年お世話になった館員の多くは私を覚えており、歓迎してくれた。たとえば複写課の館員は偶然廊下ですれ違っただけにもかかわらず、わざわざ英語の通訳を立てて、不便はないか、史料の複写があれば遠慮なく言うように、と声をかけてくれたり、短期滞在の報告者のために史料撮影日を早めに設定してくれたりするなど細々と気遣ってくれた。また閲覧室の館員は予定よりも早く申請史料が到着するとわざわざ席まで持ってきてくれた。このような彼らの厚意が非常にありがたく、時に困難であった史料収集の励みとなった。

その他にも今回の調査ではこのアルヒーフが備える本屋と食堂(位置確認のみ)を利用することができた。本屋は非常に小さな一室であるが、そこでは新刊・既刊の専門書を驚くほど安価に購入することができる。ロシアでは街中の大型書店であっても専門書を手に入れることが難しいため、むしろこうした文書館内の本屋が非常に重要なのである。

2.2 ロシア歴史図書館 Государственная публичная историческая библиотека России (略称 РГИБ)

モスクワにある歴史を専門とする図書館である。報告者はここで 18 世紀前半の宮廷や政治に関する史料を検索し、閲覧した。この図書館で作成した利用証はアルヒーフなどと異なって有効期限がないため、そのまま利用することができる。今回の利用時には図書館が改築工事を行っており、昨年と比べて内部の状況が大きく変化していた。特に図書検索や図書申請、図書の受け渡しカウンターなどがすべて一か所に集約されたため、利用者も集中し、時に混雑を招いていた。そしてコンピューターの検索システムも整備されていた。以前は目録カードか検索システムで図書を探し、書名や著者名、

複雑な配架番号などを申請用紙にそれぞれ複数箇所記載して図書を申し込まなければならなかったため、時間がかかり、写し間違いによる申請却下も起こっていた。しかし、新たな検索システムでは、利用者名と利用者番号を用いて自分のページにログインでき、検索した書籍をシステム上から利用申請することができるようになったのである。また書籍名だけではなく目次も登録されているため、同時に双方に単語検索をかけることもでき、関心のある書籍あるいは論文を容易に見つけることができる。これは非常に便利なシステムであるのだが、ややわかりにくい部分もあり、申請を完了し損ねた報告者は翌日に史料が受け取れず、改めて申請し直したという苦い経験をした。しかしながら短時間で多くの書籍を検索・申し込みできるようになったことは、あらゆることに時間のかかるロシアの図書館事情にとって喜ばしい進歩である。

主な雑誌は閲覧室に配架され、自由に手に取って読むことができる。そのため、ただ雑誌の目次を眺めているだけでも勉強になる。また閲覧室は静かで wi-fi 環境も整っているため、調べ物をしながら論文や雑誌を読み、効率よく研究を進めることができたのである。また、この図書館では研究にいらしていた日本人のロシア史研究の先生に偶然お会いし、モスクワの文書館事情などいくつか有益な情報を得ることができた。

2.3 国立歴史博物館 Государственный исторический музей

モスクワのプローシャチ・レヴォリューツィ駅から徒歩 2 分ほどの場所にある、歴史を専門とする博物館である。木曜日は 11 時から 21 時まで、それ以外の開館日は 10 時から 19 時まで見学することができる。休館日は火曜日と毎月第一月曜日である。また学生は国際学生証を提示すれば 100 ルーブルで見学することができる。

この博物館では古代から革命までの非常に貴重な資料が数多く展示されている。報告者が専門とする 18 世紀前半の展示は非常に華やかで、衣装や肖像画、大砲などといった視覚的に面白い展示品が多かった。特に貴族の肖像画や当時の地図および史料の展示は非常に参考となった。資料によってはロシア語と並んで英語のキャプションもつけられており、外国人観光客への配慮を感じることができる。時代順に構成された部屋ごとに展示テーマが決められており、その展示室が扱う時代の概要が A3 ほどの大きさの紙にまとめられて展示室の入口部分に置かれている。来館者はそれを読んで元の場所に戻すのであるが、読まない来館者も多い。日本の博物館や展覧会などでは大きなパネルが貼られることが多いため、こうしたシステムは報告者にとって初めて見る形態であり、博物館学的な展示の面で非常に参考になった。また、展示ケースの上部には番号が振られており、その順番通りに見てゆくと展示内容が繋がるように工夫されていた。ただしこの博物館に限らずロシアのほとんどの博物館・美術館で見られた現象であるが、ケースの多くは古いものでガラスの反射がひどく、また窓の多い展示室が多いこともあり、肝心の展示物が見えにくいということも多かった。部屋によっては窓が開いているところもあり、資料の保管という観点から疑問に思うところもあった。

ロシアの博物館や美術館では各展示室に学芸員(ないしは監視員)の女性が座っていることが多い。そのため、来館者は時に彼女たちから様々な情報を得ることが可能である。たとえば、報告者はある学芸員に出身などを聞かれ、ひとしきり雑談を交わした後でその展示室の装飾に本物の金が用いられていることや、その展示室の一番の見どころなどを教えてもらった。また、他の学芸員からは別室でセルギエフ・ボサードという都市に関する特別展示を行っていることや、見どころ、その展示室への行き方などを教えてもらった。そうした情報の中には既知のものもあるが、展示室を知り尽くしている女性たちの話はたとえ全てを理解することができなかったとしても、非常に面白いものであった。特に来館者の少ない平日の午前中は、こうしたやり取りが容易に行えたように感じた。

2.4 ロシア国立歴史アルヒーフ Российский государственный исторический архив(略称 РГИА)

18 世紀から 20 世紀初頭にかけての様々な種類の史料を所蔵するサンクト・ペテルブルクの古文書館である。通行許可証を作成してもらう手順は昨年と同じであるが、有効期限の切れた通行許可証を持参したほうがよい。なぜならば、それは前回の利用の証明であり、そこに貼られた顔写真を再利用してくれるため、改めて写真を持参しなくても済むからである。実際に、前回の通行許可証を手にした館員が態度を和らげ、発行手続きを早めてくれた。

今回の調査ではまず図書目録カードをドルゴルーキーという名字で調べた。この目録カードは非常に整理されているのだが、古いものは筆跡が読みにくく、判読が難しかった。しかし、このアルヒーフの検索システムはまだ完成しているとは言い難く、目録カードでの検索が最も確実なのである。この作業によってある程度、申請する史料を確定した後、コンピューターのデータベースを用いてその史料のフォンド番号およびその名称などを調べた。フォンド番号によっては 1 日に申請できる件数が決まっているため、申請前にどの史料をいつ申し込むかということをよく検討する必要がある。なぜならば、このアルヒーフでは史料の受け取りに 3 日かかるため、判断ミスが史料収集に大きな影響を与えてしまう可能性もあるからである。史料の多くはマイクロフィルムの形態であるが、まれに現物

史料が出てくる場合もある。その際の閲覧方法はモスクワのアルヒーフと比べて厳格である。すなわち閲覧者はカウンター横の小さな部屋でのみ閲覧が許され、1 度に 1 件ずつしか読むことができない。そしてそれを返却しなければ次の史料が読めないのである。そのため、報告者の場合は閲覧していない史料の残存状況と読んでいる史料の内容を秤にかけて、精読すべきか読み飛ばすか、ある程度当たりをつけなければならなかった。これらの一連の作業を通じて、このアルヒーフでは、かつてのヴァシーリー・ルキーチの所領が彼の死後誰に受け継がれたかということなどが書かれた断片的な史料を発見することができた。どの史料もヴァシーリー・ルキーチを中心に扱ったものではないが、モスクワのアルヒーフで入手した史料と組み合わせることによって有意義な史料になりうるのではないかと期待している。

2.5 エルミタージュ美術館 Государственный эрмитаж

ペテルブルクのネフスキー・プロスペクト駅とガスティニー・ドヴォール駅から徒歩 10 分ほどのところにある世界屈指の美術館である。日曜日和祝日は 10 時 30 分から 17 時まで、その他の開館日は 10 時 30 分から 18 時まで見学することができる。休館日は月曜日である。国際学生証を提示すれば、学生は無料になるため、報告者は少しでも時間ができると必ずここへ足を運ぶようにしていた。

収蔵美術品の数は 300 万点、展示室をすべて歩くと 20km にも及ぶというこの巨大な美術館では、あらゆる時代や地域的美術品を見ることができる。これらの収蔵品の多くは歴代の皇帝が収集したものであり、一瞥するだけでも芸術のパトロンとしての皇帝の重要性やそれを維持することの(財政的)難しさを見て取ることができる。有名な作品の前はたいいてい人で賑わっているが、多くの人が通り過ぎてしまう場所にも素晴らしい傑作があるため、そのような作品をじっくりと鑑賞するのも趣深い。また、この美術館は収蔵品のみならず、内部の宮殿装飾も大きな見どころである。展覧会では再現不可能な豪華で繊細な装飾、壁面一杯に配置された絵画、廊下、中庭などである。特に壁に飾られた絵画は、時に高い場所にあって見づらいと思うこともあるが、当時の宮殿においてそのように惜しげもなく飾られていたことを体感させてくれるものである。

このように作品・建築物ともに素晴らしい美術館であるが、いくつかの疑問も存在した。たとえば、窓のある展示室が多く、風や日光が絵画に当たっているのを目にしたが、作品の保護という観点からはよくないのではないだろうか。しかし、そもそも建物自体が博物館として作られたものではなく宮殿を転用したものなのであるから、仕方のないことでもある。またそうした状況こそが、本来の宮殿とそこに配置された美術品の有様なのだととらえることもできるだろう。作品保護と展示のバランスの難しさを実感した。

2.6 調査のまとめ

以上のように報告者は上記の 5 施設を中心に史料収集および見学調査を行った。調査の中心はあくまでもアルヒーフや図書館における史料収集であったが、昨年度の反省を踏まえて効果的な史料収集を行うことができたと考えている。特にモスクワでは、アルヒーフの館員をはじめとした人々の助けによって様々な情報を得て目的の史料を入手することができた。また日本人の先生とお会いし、図書館や文書館などの情報をいただけたことも非常に心強かった。このように、歴史の専門家たちと顔見知りになり、つながりを作ることによって、一人では困難な調査・研究が進んでゆくのを体感し、改めて人とのつながりが非常に重要であると認識した。このようにして今後少しずつでも、他の館員や利用者などとのつながりを広げていきたいと考えている。

そして、これらの史料収集の空き時間に美術館や博物館を見学し、ロシア皇帝や貴族たちの生活様式や文化を確認することができたのも大きな収穫であった。近年、日本の博物館などにおいてもロシアに関する展覧会が開催されているが、現地で実際に目にすると少し異なっている点が見え、参考になった。展示や運営の仕方などの違いも興味深かった。その他にも、宮殿や庭園を散策したり、一般の書店を覗いて歩いたりすることもできた。これらの体験は今後のロシア研究を進めてゆく上で、物理的な史料収集成果と併せて重要になるであろう。

3. 今後の研究計画、展望

本調査で収集した史料を翻訳・分析し、昨年収集した史料と組み合わせることにより、「18 世紀ロシアにおける帝位継承と貴族—ピョートル 2 世遺言状偽造事件とヴァシーリー・ルキーチ・ドルゴルーキーを手がかりに—」(仮題) というテーマで 18 世紀ロシアにおける皇位継承と貴族の関わりを再構築してゆく。そして近世ロシア貴族のあり方、ロシア政治史における皇位継承の位置づけを再考する。その研究成果の投稿先は現状では未定であるが、査読論文として発表して本調査の成果とし、宮廷クーデターと貴族、皇帝の関係性について分析する予定である博士論文に結びつけてゆきたい。

注

1. 鈴木佑梨「一八世紀ロシアにおける宮廷クーデター研究の現状——一七三〇年政変を題材に——」『お茶の水史学』第 57 号、2014 年 3 月、121-149 頁。
2. Курукин, И.В., Плотников, А.Б., 19 января - 25 февраля 1730 года: События, люди, документы. (Серия <Исторические исследования>), Москва, 2010. Фаизова, И.В., "Манифест о вольности" и служба дворянства в XVIII столетии, Москва, 1999.

参考文献

- 阿部重雄 『タチーシチェフ研究—18 世紀ロシア—官僚＝知識人の生涯と業績』刀水書房、1996 年
- 加藤史朗 「一八世紀ロシアの専制政治をめぐる若干の考察—シンシア・ウィタカー氏の報告に寄せて」 『ロシア史研究』第 66 号、2000 年、44-60 頁
- 田中良英「一八世紀初頭におけるツァーリとエリート—元老院の地位と活動を手がかりとして—」『スラヴ研究』第 46 号、1999 年、91-124 頁
- 鳥山成人 『ロシア東欧の国家と社会』恒文社、1985 年
- Kisaki, Ryohei. (eds.), *The Genealogical Tables of Russian History* (New Edition), Vol.1-7, 2002.
- LeDonne, J.P., *Absolutism and Ruling Class: The Formation of the Russian Political Order 1700-1825*, New York&Oxford, 1991.
- Meehan-Waters, Brenda., *Autocracy & Aristocracy : the Russian Service Elite of 1730*, New Jersey, 1982.
- Raeff, Marc., *Plans for Political Reform in Imperial Russia, 1730-1905*, New Jersey, 1966
- Whittaker, C.H., "The Idea of Autocracy among Eighteenth-Century Russian Historians", *The Russian Review*, Vol.55, 1996, pp.149-171.
- Yaney, George L., *The Systematization of Russian Government : Social Evolution in the Domestic Administration of Imperial Russia, 1711-1905*, Illinois, 1973.
- Анисимов, Е.В., Россия без Петра : 1725-1740., Санкт-Петербург, 1994.
- Гордин, Я., Меж рабством и свободой : 19 января--25 февраля 1730 года, Санкт-Петербург, 1994.
- Курукин, И.В., Эпоха "дворских бурь" : очерки политической истории послепетровской России, 1725-1762 гг. Рязань, 2003.
- Курукин, И.В., Плотников, А.Б., 19 января - 25 февраля 1730 года: События, люди, документы. (Серия <Исторические исследования>), Москва, 2010.
- Лотман, Ю.М., *Беседы о русской культуре : быт и традиции русского дворянства (XVIII-начало XIX века)*, Санкт-Петербург, 1994. (桑野隆、望月哲男、渡辺雅司訳 『ロシア貴族』筑摩書房、1997 年) .
- Фаизова, И.В., "Манифест о вольности" и служба дворянства в XVIII столетии, Москва, 1999.

すずきゆり／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

今回海外調査の機会をえた鈴木佑梨さんは、2013 年 4 月に大学院博士後期課程に進学し、近世ロシア政治史を専攻している。彼女の専門は 18 世紀前半のロシアの政治、とりわけそこで頻繁に繰り返される宮廷クーデターの構造分析とその意義の解明であるが、この時代はピョートル改革とエカチェリーナ 2 世の啓蒙専制政治の狭間の時代として、これまで歴史家の関心を惹いてこなかった。しかしロシアの近代化と独自の統治構造の解明を考える際に、この時代に焦点を当ててその政治的特質を解明することはロシア近世史研究にとって大きな意義を持つ。今回の調査では、修士論文で論じた 1730 年政変においても重要な役割を果たした大貴族ドルゴルーキー公が関与したピョートル 2 世の偽遺言状関連史料の収集を主たる目的として、ロシア国立古文書アルヒーフなど代表的な 5 つの文書館・図書館・博物館を訪れ、各種の貴重な史料を入手した。ロシア史の資史料は、往事に比べ格段にアクセスしやすくなったとはいえ、まだまだ日本で簡単に入手できるものは少ない。なにより上記報告書にあるように、短期滞在ではその利用に大きな制約があるなかで各種文書館を実際に訪れ、利用方法を体得し史料収集を行った経験は、長期留学も視野に入れた今後の研究にとってたいへんに貴重なものとなったことは間違いなく、今後の研究のさらなる進展が期待される。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・安成英樹)

¹鈴木佑梨「一八世紀ロシアにおける宮廷クーデター研究の現状——一七三〇年政変を題材に一」『お茶の水史学』第 57 号、2014 年 3 月、121-149 頁

²Курукин, И.В., Плотников, А.Б., 19 января - 25 февраля 1730 года: События, люди, документы. (Серия <Исторические исследования>), Москва, 2010. Фаизова, И.В., "Манифест о вольности" и служба дворянства в XVIII столетии, Москва, 1999.

Imperial Succession and Aristocracy in Eighteenth Century: from the Forged Will of Peter II

Yuri Suzuki

The purpose of this research is to explore how was aristocracy involved in imperial succession and what was the political system in eighteenth century by reconstructing the case of the forged will of Peter II. In this case, the great noble family was in decline. I visited Russian State Archive of Ancient Acts, Russian Historical Library, State Historical Museum in Moscow, Russian State Archive of Historical Acts, and Hermitage Museum in St. Petersburg to collect historical sources such as judicial documents, decrees and reports. The materials I collect will be a great contribution to my future research.